

心理学と文体論——比喩の修辭効果の認知——

楠 見 孝

本稿では、心理学と文体論をとらえる視点として、文体の心理学的研究を概観してから、文体の修辭的效果の研究が文体論（中村，1991，1993）と心理学においてどのような方法論で進められてきたのかを比較する。そして、比喩の修辭効果の認知心理学的研究を例に挙げて検討し、今後の課題について述べる。

1. 文体の心理学的研究の動向

文体の心理学的研究は、波多野完治が開拓した文章心理学に始まる。一連の研究（波多野，1990 ほか）の手法は、(a)作家の文章の構造的特徴の計量的抽出（たとえば文の長さ、色彩語、比喩表現など）、(b)計量的抽出に基づく文章の型と作家の性格や創作態度との関係の同定（たとえば、谷崎潤一郎の社会・人間志向と志賀直哉の事物・自然志向）、(c)文章が読者の評価に及ぼす心理的な基礎の解明——からなる。「文体論といえば、ひとこと、数表とそこから大胆に結論を導く水際立った手並みがすぐに浮かんできたほど、波多野完治の文章心理学の影響力はすさまじいものであった」（中村，1993，p. 105）というように、波多野の文章心理学は、心理学の世界よりも文体論そして文芸研究において強い影響力をもった。さらに、安本（1965）は文体の計量的研究を推進した。たとえば、100 人の現代日本文学作家の文体を特徴づける指標として、30 指標を取り上げ、因子分析によって 3 因子を抽出し、直喩、声喩、色彩語などの使用頻度が一つの因子として特徴づけられることを見出した。しかし、こうした研究は、科学的手法ではあるが、心理実験データではなく言語材料のデータが中心であったため、心理学の一分野としては大きな地位を確立しなかった。こうした文体の特徴が読者の読解や

鑑賞に与える影響についての実験的研究は、1970年代後半に、認知心理学が盛んになるまでは多くなかった。

認知心理学が盛んになると、文章や物語の理解や産出の過程が実験的に取り上げられるようになってきた。しかし、これらの研究は文体の心理学的研究というよりは、言語理解の研究であった。

本稿が焦点を当てる比喩研究に関しては、1960年代までは言語や発達研究の一テーマとして、単発的におこなわれていたにすぎない。したがってデータや理論の積み重ねはあまりなかった。しかし、1970年代後半に、レトリックの復権と認知心理学の台頭が結びついて、『比喩と思考』(Ortony, 1979)が出版されると、これが研究の盛んになる契機となった。さらに、1980年代に入ると認知言語学者レイコフら(Lakoff & Johnson, 1980)は一連の著作で、比喩が概念体系や認識の基盤に依拠しており、比喩には身体や知覚の経験を抽象化したイメージスキーマによって支えられているものがあることを主張した。それは、言語学者のみならず心理学者にも比喩研究の重要性を気づかせることになった。一方、日本では、『比喩表現の理論と分類』(中村, 1977a)、『比喩表現辞典』(中村, 1977b)や『レトリック感覚』(佐藤, 1978)の出版が、比喩に関心が向けられる契機になった。そして、日本における比喩の心理学的研究の初期の成果として『メタファーの心理学』(芳賀・子安, 1990)が出版された。

現在、心理学における比喩研究は、認知科学、認知心理学の一分野として、認知言語学や人工知能学(たとえば、内海, 2003)の影響を受けて進められている。しかし、文体論の研究を踏まえた研究はそれほど多くない。文体研究は比喩などの言語表現だけではなく、作者の創作過程や読者における表現の効果をも研究領域と考えるならば、文体論を踏まえ、それに関わる認知的メカニズムに焦点を当てる心理学的研究はもっと盛んになるべきと考える。

本稿では、これらの研究の流れを踏まえて、心理学と文体研究をつなぐために、比喩の修辞効果の認知について取り上げて検討していく。

2. 文体の修辭的効果の検討

2.1 文体論における修辭的効果の検討

文体の修辭的効果を明らかにすることは、文体論にとって重要な課題である。中村（1993）は文体論の基礎を「作者が発した言語表現が読者と接して文体的現象を引き起こす。その仕組みを明らかにするためには、一般に、どのような表現がどういう効果を挙げ、どんな印象を与えやすいのかという点を、広く言語表現全体の問題として考察すること」（p. 186）としている。さらに、「表現のどのような在り方が読者にどういう伝達効果をもたらす可能性があるかを肌理細かく調査し、その結果を学問的に考察することが、文体分析をできるだけ客観視し、理論的に展開する基盤となることは疑えない」（p. 188）としている。心理学においても、読者における表現の理解過程を解明するとともに、その言語材料の表現特性を吟味しておくことは重要な目的である。その点で、心理学と文体論の方法は、一般の被験者を用いる実験的手法と研究者による言語調査や内省的方法という点で異なるが、目的は共通すると考える。

中村（1993, p. 204）は文芸に向かう文体分析の手順として、以下の4ステップを挙げている。

①作品の文体印象の広がりや濃淡の実態を調査や内省によって推定する。ここで、修辭は作者の対象の捉え方や思考方式を探る手がかりとなる。

②作品のことばの在り方を展開に即して多角的に分析し、作品言語の特質を可能な限り具体相において描き取る。

③文体印象の測定結果と作品言語の分析結果を照合し、両者の対応を検討する。

④対応の得られた個々の言語特徴を文体的特徴と認定し、それらの有機的統合である文体因子を展開の相において把握して、作品の在り方を構造的に記述する。

このように、文体の効果を、研究者の経験と直観に基づいて判断する方法は、エキスパート（熟達者）が読者を代表する方法である。たとえば、中村

(1993) は、16 の文体印象の要素（対象把握，叙述態度，作品感触のカテゴリ）と 41 の言語的特徴（発想，文構成，語法などのカテゴリ）のマトリックスに基づいて，対応を検討している。その理由として「表現効果に関するデータや学問的知見がそろっていない」ため「内省に基づく推測で代用する」としている。しかし，「文体の問題を，作品を舞台に展開する作者と一読者の対話であると，その文体現象の個別的な性格を強調して捉える立場に立つなら，文体印象の把握も文体効果の認定も，このモデルの場合のように，一個人の判断による方がむしろ正道だということになるかもしれない」（p. 227）と述べている。この中村の内省によるデータは，エキスパートの一事例として，非常に価値がある。さらに，心理学的研究を加えるとすれば，多くの読者の評価データを取り，このエキスパート評価とのズレや共通性を明らかにし，要素と特徴間の相関を求め，因子分析によって抽出した因子と文体印象や分析点のカテゴリとの対応を調べることによって，各項目の重要性を数量的にみることができると考える。

2.2 心理学における修辭的效果の検討

心理学は，文体の修辭的效果について，一般性，再現性，客観性をもった記述と説明をおこなうために，多くの人の判断を求める。その平均データや個人差データに基づいて，効果を規定する要因やプロセスを明らかにし，表現を分類する。こうした心理学的研究は，文体論研究と相互補完的關係にあると考える。

文体の修辭效果の心理学的研究は大きく以下の 4 つのステップに分かれる。

①心理実験や調査のための言語材料を収集する。中村（1977b）の『比喩表現辞典』は最もよく使われているリソースである。一方，海外の研究と比較するために，海外の心理実験で使われた材料を翻訳することもある。この段階で，心理学者は，材料の文体印象が異なるようにして，偏りがないようにする。あわせて，語彙の出現頻度や熟知度など（たとえば天野・近藤，1999）を調べ，一定水準以上のものを利用する。中本・楠見（2004 b）は国内外で用いられた比喩研究の材料に基づく実験用の 120 からなるリストを作成している。

②言語材料の形式を統一する（例：AはBだ）。それらの材料に対して、AとBの類似性、理解容易性、斬新さ、比喩としての良さなどの評価を求める。そして、言語表現の特性や印象を多角的にとらえる。

③心理実験や調査をおこなう。言語材料は系統的に構成することが多い（元の材料の構成語を入れ替えて、「BはAだ」「AはCだ」なども比較材料として使う）。②と同じ文体印象の評価に加えて、理解時間、連想、分類、記憶、解釈の記述などを求める。たとえば、楠見（1995）では、実験参加者は、一つの条件に15名以上、調査の参加者は、1つの評価に26名以上を割り当てている（結果の精度を上げるにはもう少し多い方が望ましい）。また、参加者は、言語能力や経験が比較的等質と考えられる同じ大学の学生である。

④実験や調査データに基づいて、文体の評価や理解に及ぼす言語特徴の要因を検討し、評価・理解過程に関するモデルを構築する（楠見，1995；内海，2003）。

つぎの節では、このステップに基づく比喩の修辭的効果に関する認知心理学的研究について述べる。

3. 比喩の修辭的効果の心理学的検討

ここでは文体の重要な特徴である比喩を取り上げその修辭的効果を支える認知過程を検討する。とくに、「AはB（のよう）だ」型の隠喩と直喩のどこが異なり、どのようにして評価や理解に影響し、効果を生み出すのか、それはどのような言語的知識や経験をベースにしているのかについて、認知心理学の研究に基づいて検討する。

3.1 直喩と隠喩の区別の規定要因

隠喩と直喩は、対象間の類似性認識に基づいて成立する。直喩が「ようだ」「みたいだ」などの比喩の指標がある比喩なのに対して、隠喩は比喩指標がない比喩である。中村（1977a）の『比喩表現の理論と分類』は、500ほどの比喩指標要素を挙げている。そして「直喩と隠喩の境界は、結局「そっくり」「も同然の」「匹敵する」「疑われる」「しのばせる」といった言語形式を比喩の指標として認めるかどうかにかかっている」と述べている。一方、

認知心理学は、比喩指標自体の認定よりも、作者がある対象をたとえる時に、比喩指標をつけるかつけないかを決める要因や、読者が隠喩と直喩のどちらの表現をより適切と判断するかに関心がある。

別の見方をすれば、直喩はかけ離れた対象の間でも作者の意志によって、比喩指標をつけて類似関係を設定できる（佐藤，1978）のに対して、隠喩は、比喩指標がないため以下のどれかの前提条件が成立していないと、読者は比喩として理解できない。国内外の心理実験データは、以下の前提条件が成立した時に、直喩よりも隠喩としての表現が好まれることを示している。

①慣用化

慣用化には二つのパタンがある。第一は、主題とたとえる語の組み合わせが慣用化している場合である。たとえば、「旅」は「人生」をたとえる語として慣用化されているため、「人生は旅だ」は「人生は旅のようだ」よりも好まれる。第二は、たとえる語が慣用化して、さまざま主題と結びつけて用いられる場合である。たとえば、中村（1977）の『比喩表現辞典』を見ると、たとえる語として頻繁に用いられる語には、「Pはガラスだ（壊れやすい）」、「Qは氷だ（冷たい）」などがある。これらは類似比較陳述よりもカテゴリ包含陳述に近いため、直喩より隠喩の形式が好まれる（Gentner & Bowdle, 2001；中本・楠見，2004 a）。一方、主題とたとえる語が新奇な組み合わせの場合には直喩が好まれる。

②対象間類似性

隠喩は、主題とたとえる語の間に共有する特徴が多いことが必要である。とくに主題とたとえる語の間に目立つ類似性がある場合には、比喩指標が不要なため、隠喩が好まれる。一方、主題とたとえる語の間に共有する特徴が少ない場合には、「のようだ」などの比喩指標が必要なため、直喩が好まれる。

③対象間類似性を際だたせる文脈

比喩が、非慣用的で、主題と対象間に目立つ類似性がなくても、その類似性を際だたせる文脈があれば、隠喩が好まれる。

3.2 比喩の修辭的効果

ここでは、比喩の修辭的効果を大きく2つ、伝達効果と詩的審美的効果に分ける（内海，2003）。伝達効果は、理解をしやすくし、意味の変化、概念の構造化を引き起こす。一方、詩的審美的効果は、斬新さや比喩としての良さの認識を引き起こす。中村（2001）はレトリック、すなわち表現上の工夫をする目的として、13を挙げこれらを5つに分類している。ここで、伝達機能には、「ものの見方を開拓」し「発見的認識を伝える表現を考案」し「対象伝達の精度を上げ」「表現意図に対する忠実さを増し」「表現内容を強化する」ことが含まれる。さらに、受け手（読者）の側の反応の操作として、「受け手の理解を助ける」が含まれる。一方、詩的審美的効果には、「広義の美化をおこない」受け手の側の反応の操作として、「変化をつけ注意をひく」「受け手に表現の面白さをわからせる」、表現主体側の効用として「みずから表現を楽しむ」「表現力を示す」が含まれる。それではつぎに伝達効果と詩的審美的効果をそれぞれ見ていく。

①伝達効果

ここでは、伝達効果として、主題の理解容易性を高める効果と意味を変化させる効果に大きく分けて述べる。

第一に、直喩・隠喩によって主題を理解しやすくする効果は、主題とたとえる語の情緒感覺的イメージが似ている時ほど大きい（例：香水は花束だ）。さらに、主題またはたとえる語に両方に共通する情緒感覺的イメージを示す形容語をつけると比喩は理解しやすくなり、伝達精度は高まる。楠見（1995）の実験では、たとえば、「香水は花束だ」という比喩に比べて、共有特徴を顕在化させた「香水はかぐわしい花束だ」の方が、理解しやすいことを見いだしている。しかし、共有特徴を顕在化させると、後で述べる比喩としての斬新さは低下する。

こうした理解容易性に及ぼす要因には、前述した比喩自体の慣用性やたとえる語が顕著な意味を持ち、比喩のたとえる語として頻繁に用いられていることが関わる。さらに、比喩のイメージの浮かびやすさが影響する。とくに、たとえる語のイメージの浮かびやすさの方が、主題のそれよりも理解しやすさに及ぼす影響力は大きい（Kusumi, 1987）。

また、作品の全体を通しての文脈ともいえる作品イメージは比喩の理解を促進する。たとえば、中村（1977a）は『比喩表現の理論と分類』において、川端康成『東京の人』を例に挙げて、「嫉妬が波のように打ち返して」「顔にはさざ波のように、微笑がひろがって」「楽しさは、水の流れのように敬子の心を満たし」というように、登場人物の容姿や心理をたとえる際に、「波」「水」「潮」が用いられていることを指摘している。その結果、水のイメージがもつ{ぬれる、動く、流れる、透明な、……}特徴が作品のイメージを形成している。これは、読者側が形成するイメージに影響を及ぼし、主題とたとえる対象の情緒感覚的類似性の発見を容易にしている。

また、直喩や隠喩は、抽象概念を説明する時に、読み手の理解を助けるために、しばしば用いられる。たとえば、「愛は戦争／ゲーム／共同制作である」は、抽象概念を実体化し構造を与え、体系的な表現と理解を可能にする。認知言語学者レイコフら（Lakoff & Johnson, 1980）は、比喩が単なる言葉の綾ではなく、概念に構造を与え、日常生活における思考・言語や行動に遍在していることに注目している。楠見（2002）は大学生に愛の比喩を作らせ、あわせて質問紙調査をおこない、愛の比喩の背後には、作者の経験や信念が反映されていることを見いだしている。

第二に、直喩・隠喩の意味変化は、主題の情緒・感覚の意味がたとえる語のそれに引き寄せられる形で起こる。たとえば、「心は沼だ」では、「心」の意味は、{深い、どろどろした、引き込む}といった関連する意味特徴を同時に顕在化（表現内容を強化）することになる。このように、たとえる語が顕著な意味特徴をもつと意味は大きく変化することになる（楠見，1985）。

②詩的・審美的効果

詩的・審美的効果として、ここでは、直喩・隠喩が読み手に斬新さを認識させたり、比喩としての良さを感じさせたりするのに関わる要因を検討する。これらは、読者の受容反応に関わる操作であり、変化をつけ、注意をひき、表現の面白さを感じさせることになる。

直喩・隠喩の斬新さの効果は、主題とたとえる語のカテゴリがかけ離れているほど大きくなる。たとえば、三島由紀夫が『金閣寺』で用いた「美というものは、そうだ、何と云ったらいいか、虫歯のようなものなんだ」は、

「美」と「虫歯」のカテゴリがかけ離れており、きわめて斬新である。ここで「それは、舌にさわり、引っかかり、痛み、自分の存在を主張する。……」といった両者を結びつける根拠を示す文脈がないとこの比喩は理解ができないため、良い比喩とは認識されない。したがって、良い比喩と評価されるためには、理解しやすさと斬新さの両方が必要である。楠見（Kusumi, 1987）は 96 の比喩を合計 230 名の大学生に評価させて、主題とたとえる語のカテゴリ的意味のズレが斬新さを引き起こし、情緒的意味の類似性を見つけやすさが理解しやすさに影響し、両者ともに高い文が良い比喩と評価されることを示している。これは、アリストテレスも『弁論術』で「大きくかけ離れたものの中にさえ類似を見てとるのが、物事を的確につかむ人の本領なのである」という主張とも合致する。

作家は、理解しやすくても慣用化された比喩を使うことは避ける。作者が斬新な比喩を使用するのは、みずから表現することを楽しむことであり、読者にその能力を示すためでもある（楠見, 2005 ; 中村, 1991）。

4. 今後の課題

最後に、文体の心理学的な研究の今後の課題を、認知心理学の観点から検討する。心理学的な文体研究は、2. で述べたように、波多野（1990）の文章心理学研究の科学性と客観性を一層進展させたものといえる。

中村（1993）は、こうした「客体的文体論の功罪」を論じているが、これは、客観的手法を推し進めた心理学的文体研究とも共通する。中村はプラスの側面としては、文学の神秘を文章の言語的特徴に基づいて統計的に明らかにした点、名人芸から科学的に検証可能な手法を確立した点を挙げている。一方、マイナスの側面としては、第一に、文章を一定の言語単位に区切って集計する要素主義的方法には、言語作品という統一体をとらえるには限界がある点、第二は、言語調査の数量的解釈にあたって、作品の深い読みが欠けていることがある点、第三は、客観的な分析手法の限界、たとえば、数量化できる言語特徴だけを文体的特徴としてとらえる点を挙げている。これに関しては、中村は「客体的分析というものが文体論として生きてくるには、それが言語の奥にいる人間の主体的な行為と繋がる時である」としている。心

理学は、これらの手法上の問題を解決するために、(a)実験や調査に用いる言語単位を文から文章そして物語に拡張し、(b)人の解釈や評価の過程の実験や調査データに基づいて主体的行為をとらえようとしている。しかし、作品自体の深い読みは、心理学者単独では難しく、文体研究者と協同で研究を進めていくことが必要と考える。それにはつぎの二つの段階が考えられる。

第一の段階は、研究が進んでいる比喻を手がかりに、文芸作品における文体の理解や効果を、認知心理学、文体論、認知言語学、人工知能などの学際的研究で進めることである。文体論は、作家の特徴をとらえた生き生きとした言語材料を提供し、その効果に関する洞察を示す。認知言語学は、言語と認知を基盤とした仮説を提供する。これらによって、文体に関するより適切な心理実験が可能になると考える。さらに、心理データは文体の理論化やモデル化において重要な役割を果たす。また、人工知能（たとえば、内海，2003）は、モデルの形式化やシミュレーションによって、理論の精緻化と検証に寄与する。

第二の段階は、文芸作品における文体とその創作・読解過程に関わる新たな研究の枠組みや理論の構築である。近年、認知詩学（cognitive poetics；Gibbs, 1994）や認知文体論（cognitive stylistics；Semino & Culpeper, 2002）といった、説明概念に認知過程や知識表象を用いて、物語や詩の文体を検討しようとする試みが始まっている。これらは、「作者と読者によって生じる動的な文体现象」（中村，1993）を解き明かす新たな研究の枠組みになると考える。

参考文献

- 天野成昭・近藤公久『日本語の語彙特性（NTT データベースシリーズ）』（1999 年 三省堂）
- Gentner, D., & Bowdle, B. F. Convention, form, and figurative language processing. (*Metaphor and Symbol*, 16 巻 2 号, 2001 年)
- Gibbs, R. W. Jr. *The poetics of mind: Figurative thought, language, and understanding*. (1994 年 Cambridge University Press)
- 芳賀純・子安増生『メタファーの心理学』（1990 年 誠信書房）
- 波多野完治『文章心理学（波多野完治全集 1）』（1990 年 小学館）

- Kusumi, T. Effects of categorical dissimilarity and affective similarity of constituent words on metaphor appreciation. (*Journal of Psycholinguistic Research*, 16 巻 6 号, 1987 年)
- 楠見孝『比喩の処理過程と意味構造』(1995 年 風間書房)
- 楠見孝「比喩生成を支える信念と経験：愛の比喩の背後にある恋愛規範と経験」(『日本心理学会第 66 回大会発表論文集』2002 年)
- 楠見孝「文芸の心理：比喩と類推から見た三島由紀夫の世界」(子安増生編『芸術心理学のかたち』(2005 年 誠信書房)
- レイコフ, G.・ジョンソン, M. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳))『レトリックと人生』(原著 1980 年 1986 年 大修館書店)
- 中本敬子・楠見孝「隠喩形式への選好に対する比喩の適切性とベースの繰り返し反復効果」(『日本認知科学会第 20 回大会発表論文集』2004 年 a)
- 中本敬子・楠見孝「比喩材料文の心理的特性と分類：基準表作成の試み」(『読書科学』48 巻 1 号 2004 年 b)
- 中村明『比喩表現の理論と分類』(国立国語研究所報告 57 号 1977 年 a 秀英出版)
- 中村明『比喩表現辞典』(1977 年 b 角川書店)
- 中村明『日本語レトリックの体系』(1991 年 岩波書店)
- 中村明『日本語の文体：文芸作品の表現をめぐって』(1993 年 岩波書店)
- Ortony, A. (Ed.) *Metaphor and thought*. (1979 年 Cambridge University Press)
- 佐藤信夫『レトリック感覚』(1978 年 講談社)
- Semino, E. & Culpeper, J. *Cognitive stylistics: Language and cognition in text analysis* (2002 年 John Benjamins Publishing)
- 内海彰「比喩によってどのように詩的効果が喚起されるか：比喩の鑑賞過程の認知モデルに向けて」(『人工知能学会 17 回全国大会論文集』2003 年)
- 安本美典『文章心理学入門』(1965 年 誠信書房)

(くすみ・たかし 京都大学助教授)